

# 國學院大學學術情報リポジトリ

The Pavilion "Trip around the World" at the Paris World Exposition in 1900 : the Impression of the Japanese who Saw Exhibited Gaigi : Special Issue : The 60th Anniversary of Museum Studies Courses : Problems in Museums and Museology 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Maekawa, Masahide メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000333">https://doi.org/10.57529/00000333</a>

# 一九〇〇年巴里万国博覧会の〈世界一周館〉

— 芸妓の展示を見た日本人 —

前川公秀

一九〇〇年、パリで万国博覧会が開催され、多くの日本人が渡仏した。彼らは、博覧会の事務局や出品団体の関係者をはじめ、各分野の留学生たちであった。一九世紀を集大成した大規模な博覧会は、日本人たちの興味と関心を注いだ。なかには民間会社が営業的興行として設置した〈世界一周館〉のように、その内容に対し賛否両方の意見が出され論議を醸し出した催し物も登場している。

本稿では、まず〈世界一周館〉の内容や、それを見た日本人たちが抱いた感想などについて、筆者の管見した文献によって紹介することにした。そして、その催し物が、一九〇三年に

国内で開催された第五回内国勸業博覧会で設置された同様の催し物との関連や異なる点について、博物館学的な視点から提起し、今後の研究の糸口としたい。

なお、引用した文献の掲載にあたっては、内容的に類似しているものもあるが、本稿は前述の目的により問題提示することを第一義としているため、出来る限り重複した箇所も省略することなく、管見した多くの文献を掲載したためであることを述べておきたい。

## 一、〈世界一周館〉について

〈世界一周館〉は、博覧会の正式のパビリオンとは異なり、フランスの郵船会社であるメサジユリー・マリチーム社という民間企業により開設された営利をめざした見世物のひとつであった。その内容は、日本の博覧会事務局の報告によると、次のようにある。

世界一周館 本館ハ世界各国ノ景色風俗ヲ「パノラマ」及ヒ實物ヲ交ヘテ之ヲ現ハシ、且つ演藝場ヲ附属セシメテ各國特異ノ舞踏ヲ演セシムル等ノ目的ヲ以テ造リタルモノニシテ二百萬法ノ資本ヲ有スル株式会社ノ企業ニ係レリ<sup>①</sup>

すなわち興行主であるメサジユリー・マリチーム社（引用文献には「エムエム社」との表記）の船が回航する世界の港をパノラマとしたもので、ギリシャ、トルコ、エジプト、スペイン、インド、中国と日本などが取り上げられ、その各国の絵の前に、その国の人を生活させ、それを観覧させるというもので、日本は江ノ島と日光を組み合わせた景色が描かれていた。また、建

物の入り口は、日本の寺の仁王門と五重塔が造られ、異国情緒漂うものとなっていた。博覧会開催前の前年の二月に、製茶の貿易のため渡仏していた大谷嘉兵衛（一八四五—一九三三）は、準備が終了した館内を見学している。その時の感想として、

世界一周館と称する遊覧館あり表門は日本特有の仁王門を建て之と

接して五重の塔（実は六層）を造る入りて見るに内部は大円形堂にして所謂世界一週のパノラマ画は既に全部装置を終れり我邦の画は江の島恵比寿屋山上の光景と日光山内の景とを抱き合せたる大絵画にして隣は支那、次は印度埃及杯仏国郵船の寄港する沿岸の邦国を写出し各国各種の風景を聯絡綜合するの状一種奇観にして規模広大なる写真画



〈世界一周館〉の概観（絵はがき）



〈世界一周館〉のポスター

なれば恰も其地に遊ぶの感あらしむ<sup>2)</sup>

と記している。しかし、この施設の見せ物は、パノラマではなく、「各國ノ景色風俗ヲ「パノラマ」及ヒ實物ヲ交ヘテ之ヲ現ハシ、且つ演藝場ヲ附属セシメテ各國特異ノ舞踏ヲ演セシムル」とあるように、各国の人を展示し、その風俗や舞踏を見せようとするものであった。この内容について、出版社博文館の編集者として活躍した大橋乙羽（一八六九～一九〇一）は、より具体的に記している。

エム／＼会社の世界一周を見る階上階下パノラマをもて埋

めたり、入口の門は朱塗の五重塔と白木造の山門を以てす、階を登れば東洋に於ける未開国のパノラマを設く、日本の風景としては、江の島と日光山とを見せ、その前に日本家屋をつくりて、例の評判の芸者を陳列せり。采配は烏森扇芳亭の女将とや、隣は支那なり、数人の男女、画景の中に点綴して、小屋に賭博を試む、次は埃及なり、次は土耳古なり、次は印度なり、斯くの如きもの十一、二、各々その国野蛮の態を写して活人を画材となす階下には佛のマルセーユより、佛領の海岸を一週するパノラマありて、観客恰も船中に在るが如く、眼前の風景は、汽力によりて回転し、坐ながらにして、漫々たる蒼海に浮ぶの想ひあり、汽船会社の出品としては、実に妙を獲たりといふべし<sup>3)</sup>

建物は二層になっており、上階は十一・二ヶ所の寄港地の風景とその国の人を配置しており、階下にはフランス領の海岸を一周するパノラマになっていたようである。大橋は、日本の風景の前には、烏森の芸妓が「陳列せり」と記している。また、「各々その国野蛮の態を写して活人を画材となす」様子については、教育学者である下田次郎（一八七二～一九三八）が、各国の場面を少し具体的に記している。

ツール、ヅ、モンド「Tour de monde」世界一周館を見る、暹羅、印度、希臘、西班牙等の家屋、庭園を模造し、本国人を三三人づゝ雇ひ、日常の生活を為さしめ、其風俗を見るようにしたもので、順々に廻つて見るのである。我が日本もある、女五六人障子を取つた一室の中に在つて、余念なく針仕事をし、或は小説を読み居たり、椽の側には手水鉢を据へ、後ろの景色は神社のかゝりなり。支那人は三人寄つて、椅子に腰を掛け、将棋様のものを慰み居り、暹羅の女の素足を投げ出して仕事をするは無作法なり、又印度の部には黒い羅漢様の間が居り、又子供二人客の錢で手品をして其錢を貰へり、ドコ迄も亡国的なり。西班牙の部には男女と子供を見る、希臘の所には女二人居たり、隣り同士にて睦まじ、西班牙の子は其国一流の踊をおどれり。又此外に西貢等の港の景色及び東洋、西洋の都市のパノラマ的の覗きあり、又回転する大パノラマがあつて、客は船に擬せるものゝ上に立つて之を見ると、島、山、船等を画けるパノラマは動かさずして、却つて船の進行するが如く思はるゝは頗る妙なり。劇場に於ても世界旅行などを仕組み、航海の有様を出す時は、後の海や陸の幕をパノラマ的にし

て廻し、船が動くやうにみせるなり。<sup>①</sup>

各国の風景のもと、その国の人々を配置して日常生活を行わせ、それを見物するという趣向であつた。以上の文献では日本の具体的な光景について、大橋は「日本の風景としては、江の島と日光山とを見せ、その前に日本家屋をつくりて、例の評判の芸者を陳列せり」とあるのみであり、下田も「女五六人障子を取つた一室の中に在つて、余念なく針仕事をし、或は小説を読み居たり、椽の側には手水鉢を据へ、後ろの景色は神社のかゝりなり」と記しているだけだが、日本郵船会社で活躍した正木照藏（一八六二—一九二四）は、もう少し詳しく紹介している。

烏森より出品したる日本の芸妓連中は其実仏蘭西郵船会社に於て其航路の概況を觀めず為め作りたる「パノラマ」中の点景人物に雇はれたるものにして其所には各地の風景を画図或は模形して顯はせり其土地々々の男女数人を置きて以て平常生活の一般をみせしむる工夫となせり即ち日本の一区は支那区の次に在り遠見には五重の塔、桜の花盛り等を描き其前に十疊敷、椽附の一屋をしつらゑ之に畳を敷き上に彼の藝者ども或は三昧を弄し或は花牌を戦はして遊び

居れり外に扇芳亭の女将にや一老婦が椽に座わりて火鉢に鉄瓶を懸け茶道具を列べ置きたるも余程妙なり併し兎も角も花のお江戸の唄女だけありて衣服の矩合等彼の龍動の「アールス、コート」に於ける日本美人の標本程には見若しからず、ドヤヤク日本人らしき様子はあれども其前を過るときは何となく心咎めして正視するを得ざりき蓋し博覧会を見に往きたる人は誰しも同感を懐かれしならん<sup>⑤</sup>。

日本の風景の前には、日本家屋が建設され、そこに新橋烏森の扇芳亭の女将に率いられた芸妓が日々の暮らしを再現していた。当時ヨーロッパでは「ゲイシャ」と題したオペレッタが人気を博しており、日本から本物の芸者が来たことで評判となった。フランスの軍人が、一行の若い芸妓に求婚することもあったようである。フランスでは、大変な評判になったようであるが、同国の日本人々に、様々な印象を与える結果となった。

## 二、内容に対する論議

催し物について、大橋は「汽船会社の出品としては、実に妙を獲たり」と好評価をし、芸妓たちについては、全く感想を述

べていない。また、正木のように、「ドヤヤク日本人らしき様子はあれども其前を過るときは何となく心咎めして正視するを得ざりき」という感慨を持つ人もいる。しかし、人によつては、見世物的な芸妓たちの姿に怒りを懐いた人たちがいた。まず国文学者であり、歌人でもある池辺義象（一八六一―一九二三）は、帰国後の回想記のなかで、

エムエム会社の世界一週パノラマ館中には、夜に入りて国々の芝居めきたることを催すに、我が国は彼の烏森の十六紅裙に代表せられて、手躍り歌うたひせる涼しき夜も、



〈世界一周館〉日本の芸妓展示風景

汗あゆるまでぞおぼえし。それも暹哇印度等の土人の躍と並べられたるよ。<sup>⑤</sup>

と記している。池辺の想いは率直には述べられていないが、芸妓たちの演出に、どこか違和感を感じているようである。また、西洋史学者である箕作元八（一八六二—一九一九）は、一九〇〇年九月五日に、この催しを見学した。箕作は、その日の日記に、

世界一周という見せ物を見る。これはゾオラマにて、そのなかに印度、支那、日本の婦人あり。動物の見せ物のごとし。<sup>⑥</sup>

と記し、不愉快さを述べている。晒し者のような芸妓たちの様子「動物の見せ物のごとし」と述べている。最も強く反応したのは、管見では法学者の岡村司（一八六七—一九二二）であると思われる。岡村は、当初この日本の芸妓たちの演出について、噂を耳にするが、日本政府が許可することはなく、実現は難しいと考えていたようである。

当地万国大博覧会の一部に円形の大室あり。其の室の壁に

世界各国の名所を画がき、其の画の前に其の国の人を置き、坐ながらにして世界の名勝人種を見せしむるの仕懸けなり。日本のは、たしか日光と江の島の画ありしやに覚ふ。其の前にて日本の芸者に手踊りをさせると云ふことは疾くに此の地にても風評ありたる所なり。卿の書中に鳥森辺の女人が巴里に出稼ぎに行くと云ふは此の事にやあらん。されどこれは日本の面目にも関はる事なれば、日本政府にて之を許可するや否や疑はし。多分許可せざるべし。たとひ此等の女人、巴里に来ることあるも余が卿に対する心、前の如くなるに、など疑ひ玉ふことのあるべき、いと罪深くこそ。<sup>⑦</sup>

しかし、博覧会が開会し、その当日にこの催しを見た岡村は、日記の一九〇〇年五月五日の項に、まず博覧会における日本の古美術作品の展示館として法隆寺金堂を模した建物について、「所謂陳列館は神社やら仏閣やら更に分らず。横五間縦十間計りの仏堂風の建物にして、廻らすに廻廊を以てし、ギボシ付朱塗の欄干あり。朱塗といへど赤ペンキにて黒ズミ居れり。丸柱には金箔を置きたる心なるべきも是れも黄色ペンキの類にて甚だきたなし」と述べ、その要因は「此の建物を建造するに、日

本の技師大工を用ゐずして外国人に任せたるが為め、すべて法式に合はず、欄間の上の丸柱のねぢけて下の丸柱と続かざる所などありて、甚だ粗末なり」と悪評している。さらに周辺の茶屋、酒店なども「其の側に茶店、酒店あり。本郷辺のポロ下宿屋に似たり。小売店あり。便所かと怪しまる。日本國中、鐘太鼓を以て探すもこんな変テコの家屋なし。之を支那、埃及等の陳列館に比するも甚だ劣れり。之が日本の家屋かと思はる、と思ひば誠に肩身の狭き心地ぞせらる。來賓も可なり多く、口には立派なりなど御世辭を振り蒔く外人もあれど、多くは呆れたる如きケバンの顔を為せり」と酷評した上で、芸妓の演出について怒りを綴っている。

此に日本陳列館の序でに、ツールデュモンド（世界周覽パノラマ）の中に陳列せられたる日本婦人の事を附記すべし。此の事は前に記したるやも知れざるが、右のパノラマは仏國の商船会社メツサゼーマリチーム（余等の渡航の際、乗りたるも此の会社の船なり）が、其の船舶の廻航する各国の絶景をパノラマに書き、其の前に其の国の人を陳列して衆人に見せるなり。日本の処には江の島と日光との景をつなぎ合わせて書き、江の島の前に料理屋の小坐敷の如きも

のを作り、此に日本の芸者十五六人を陳列せるなり。世界各国の人の集り来る博覧会なれば、其の前には人山を築き、恰も上野動物園の狸々と異ならず。これは人間を動物とするものにして、誠に日本人の面よごし。言語同断の沙汰と謂ふの外なきも、僅かの金に迷ひ自ら動物となりて見世物にせらるる者も、呆れ返りたる者共なり。聞く所に依れば、これも当初日本政府にては右等芸者の渡航を禁ずるの旨意なりしも、林忠政が外人より鼻薬をカマせられ、よき様な事を言ひて遂に出品せしむる様になりけるなりとぞ。果して然らばどこまで馬鹿なるにや。其の馬鹿さ加減が測量しかねるなり。此の外、万国大博覧会に對する日本の失体は尚ほ多かめれど、陳列館と婦人出品とは実に其の二大失体と評すべし。万国博覧会の時に当地に来れるは誠に幸福の様なれども、又此の如き恥辱を受くと思ひば不愉快の心もするなり。

と記している。「日本の芸者十五六人を陳列」するのは、「人間を動物とするものにして、誠に日本人の面よごし。言語同断の沙汰と謂ふの外なき」ものであり、芸妓たちに対しても「僅かの金に迷ひ自ら動物となりて見世物にせらるる者も、呆れ返りた

る者共なり」と怒りに満ちている。さらに、当初日本の政府は、芸妓たちの渡航を禁止する予定であったが、事務局長の林忠政（注、林忠正）が「外人より鼻薬をカマせられ」許可したものとされている。これについては後述するが、岡村は異国の地で「恥辱を受くと思ひば不愉快の心もする」と心境を綴っている。

これは、岡村の私的な日記での記述であるので、怒り心頭というところだが、この気持は収まらず、五月三〇日に建部遯吾（社会学者）、桐淵鏡次（眼科医）とともに、日本公使に面会し、意見の陳情をすることとし、その主意書を作成することにした。

食後三人にて、万国博覧内ツールデユモンド（世界一周パノラマ）に日本婦人を列坐せしめて衆人の観に供するは、即ち人類を動物と同視するものにして、頗る人道の主旨に反し、且本邦人の体面を毀損せしむるものなれば、断然之を日本に遣帰せしむるか、然らずんば其の労務をして単に演技に止まらしめざるべからざることを論じ、遂に之を公使に陳情することに決し、其の主旨書を作りぬ。此の日本婦人の事に就きては、在巴里本邦人間にも物議甚だ多く、且聞く所に依れば、此等の婦人は一家の中に鎖縛せられ、外出を許されず、外人と交通することを得ず。粗悪の食物

を給与せられ、稍もすれば虐待の形跡ありと云ふを以て、さては右の話となりたるなり。<sup>11)</sup>

その翌日三十一日、三人は公使と面会する。

建部、桐淵二氏と同じく栗野公使を見て、ツールデユモンドの日本婦人に関する意見を陳べしに、公使も頗る同感なれども、現に英国には万国婦人共進会など云ふものあることなれば、人を見世物にすることが一概に不法とも断言せられず。且つ本人より苦情を言ひ出ざる限りは公使に於いても奈何ともすべからず。尚は不都合の事あらば時に臨みて相応の処置を為すべしとの事なりければ、三人とも之れにて十分なりと言ひて辞し去りぬ。此の事は唯偶然三人にて公使に話しなしたるのみにて、別段の事あるに非ず。有志者の運動など、誤解すべからず。<sup>12)</sup>

その頃、芸妓たちについて「一家の中に鎖縛せられ、外出を許されず、外人と交通することを得ず。粗悪の食物を給与せられ、稍もすれば虐待の形跡あり」という風評が流れており、岡村たちの陳情の後押しとなったようである。その後、芸妓たち

とパノラマを設置した会社との契約書が判明する。岡村たちは、六月二日事務局員の石原助熊を訪れ契約書を見せてもらい、契約に基づき行われていることを知る。

### 三、博覧会事務局の対応

〈世界一周館〉は、博覧会を見学した日本人たちの物議を生じることになった。では、日本の博覧会事務局は、どのように対応しようとしたのであろうか。

公式の報告書によれば、一八九三年に開催された市俄古博覧会では、「日本觀セ物ヲ興行シ頗ル醜態アリ、当時ノ事務局百方之ヲ防壓センコトヲ図リシモ、遂ニ如何トモスル態ハサリキ」と記され、詳しい状況は判明しないが、何かの「醜態」が生じ、それを防ぐことができなかったため、今回の博覧会では日本の事務局では次ぎの五つの興行物については、事前に許可を取る旨をフランス政府に通告していた。

夜建部氏と同じく、博覧会事務局員石原助熊氏を訪ひて、世界周遊パノラマ内に出勤する日本婦人の契約書を見たり。其の中に、パノラマ会社は此等の婦人を「芸者」の名義にて雇入る云々の文句あり。又、本契約は毫も道徳に違背するものに非ざるが故に、双方確実に履行すべしなどあり。女郎の甘言、疵持つ足の健歩にも似たりけり。

とあり、正式に契約も交わされており、後述するように芸妓たちへの扱いもさほどひどいものではなかった。岡村たちは、納得し、引き下がることになった。しかし、〈世界一周館〉の催しは、パノラマだけではなく、同時に人間を展示するという方法をとっていたため、同国の人々、特に岡村にとっては「恥辱を受くる」ものとなったのであった。

第一 如何ナル物件タリト雖モ日本品ヲ展列スルモノ

第二 日本品ヲ販売シ又ハ日本ノ売店、珈琲店、料理店、

茶店ヲ設クルモノ

第三 日本部以外ニ於テ日本ノ物品ヲ出品シ又ハ販売スル

モノ

第四 音楽、踏舞、劇場等日本ノ觀セ物ヲ興行スルモノ

第五 佛国又ハ外国ノ出品人ニ雇ハレタル日本人ニシテ日本ノ服装ヲ着ケシムルモノ

しかし、フランスの博覧会事務局からは何の回答もないため、一八九八年に林忠正が直接交渉に入り、その時点で「日本観セ物ノ計画ヲナセシモノハ「メッサジュリー、マリチーム」会社ノ世界一週館ニ於テ日本芸妓を雇入れ、歌舞セシムルモノ、諏訪秀三郎ノ踏舞角力興行及ヒ佛國人一名日本観セ物ノ興行ヲナサントスルモノ等アリ」ということであつた。

〈世界一周館〉は、興行内容の申請がなかつたため、直接フランス事務局と交渉した結果、「世界一週館ハ商工郵便電信大臣ニ於テ已ニ之ヲ許可シタルヲ以テ又如何トモスルコト能ハス、且ツ該興行ハ博覧会ニ対シ利益アルノミナラス、日本ノ美風ヲ公衆ニ示スノ利アリ、尚佛國事務員ニ於テ充分ノ監督ヲ加フヘキヲ以テ憂慮スルニ足ラス云々」との回答があつた。それに対し林事務官長は、「曩ニ日本政府カ予メ佛國事務局ニ交渉セシ所以ハ乃チ此ノ点ニ存スルモノニシテ、佛國事務局ハ特ニ世界一週館ニ對シ取除ヲナサントスルモノ、我要求ハ畢竟其ノ許可ニ當リ予メ協議ヲ乞フニ在リ」と回答したが、催しものの実施とその内容は、主催国のフランスと契約が交わされており、

日本には中止させる権限はなかつた。そこで、日本としては、せめて内容の事前検閲をしたいと回答したが、結局は「兩國ノ交誼ヲ障害セザラン為メ強テ強硬手段ヲ採ラサルノ適當ナルヲ認め、遂ニ其ノ交渉ヲ放棄シタリ」となつた。また、〈世界一周館〉側から「屢々本邦事務局ヲ訪ヒ、総テ設計方策ハ勿論芸妓雇入、取扱等ニ付我事務局ニ於テ意見アルトキハ何時ニテモ之ニ從ヒ改良スヘキコトヲ盟ヘリ」との話があり、すべて林事務官長の検閲を経たものとして<sup>16)</sup>いる。

しかし、世間では、芸妓たちの博覧会中の生活や境遇について、「聞く所に依れば、此等の婦人は一家の中に鎖鑰せられ、外出を許されず、外人と交通することを得ず。粗悪の食物を給与せられ、稍もすれば虐遇の形跡あり」という噂が流れていた。だが、実際は、そんなに酷いものではなかつたようである。一行を率いた扇芳亭の女将は、帰国後パリでの生活について、次のように回顧している。

巴里には博覧会開会中十ヶ月も居りまして一番長く居たのでしたがこの間は総て日本風にしてゐましたから外国に居るやうな不便も感じませんでした一行を雇ひましたパノラマ会社では婦人の事ではあるし初めての洋行では万事が不

便だらうと注意してくれまして日本の品を残らず準備をな  
し丁度日光の五重塔の模造を建てる為に巴里に行つて居り  
ました日本大工を頼み室内は急に根太を張り畳を敷き日本  
風に改築し風呂も日本芸妓は毎日入るといふから他へ行て  
は不便だらうと新らしく日本風のを設け煮物其の他も醬油  
味噌で日本風に煮るといふやうに料理まで注意が届きまし  
た其中で化粧をしたり裁縫をしたりなど致しましたので日  
本婦人の平生の生活の模様が見えて却つて面白いと会社の  
人などは態々それを見に来る人もありましたのです。<sup>17)</sup>

パノラマを主催したエムエム社は、五重塔を建てた日本の大  
工に、室内に根太を張らせ、畳を敷き、日本風の風呂を作り、  
食物の煮物なども味噌や醬油で味付けをするという様子で、「外  
国に居るやうな不便も感じません」という状況であった。ただ、  
その生活の中で、日本に居た時のように化粧をし、縫物をする  
のが珍しいと言つて、態々見に来る人がいたという。このよう  
に、日常の生活には不自由はなかったが、外出することはでき  
ず、また外からの客にも面会できなかったため、「聞く所に依  
れば、此等の婦人は一家の中に鎖籠せられ、外出を許されず、  
外人と交通することを得ず」という噂になったが、それについ

ても回顧談で次のように語っている。

(日常の生活について) これ程会社は能く注意が行届きま  
したがその代りには外から来る客は一切面会させぬといふ  
のです。私も一行が女ではあるし無暗に他の客と接近して  
妙な噂でも立てられては困るから結局この方が好いと思つ  
て居りましたが世間では誰も逢はせぬといふのでいかにも  
囚人同様の虐待でも受てゐるやうに思ひました在留日本人  
間にもいろ／＼な風説が立つに至りましたので終には会社  
にも掛合ひ夜分は兎も角昼間だけは用事のある人だけには  
面会させてくれるやうにと公使館からの口添もありまして  
此方のいふなりになりましたが一時は丸で世間の外の別世  
界でございました会社ではそれでも白粉は無いかの何のと  
能く用を聞きには来てくれますし決して不待遇ではなかつ  
たです。<sup>18)</sup>

とあるように、「決して不待遇ではなかつた」のである。当事  
者の芸妓たちと、疑惑のまなざしを以て差別的な思いで見つめ  
る者との違いであるが、この現象が三年後に国内において再熱  
する。

ちなみに、博覧会終了後、芸妓たちは直ちに帰国予定であったが、一行を率いていた扇芳亭の女将の発案で、ヨーロッパを巡演し、お金を稼いで帰ることになった。一行十五名のうち芸妓二名、料理人、女中各一名の四名は帰国することとなり、残り十一名はデンマーク、ロシア、ポーランド、ハンガリー、オーストリア、ドイツなどを巡り、日本に帰国したのは一九〇二年一月三日であった。約二年の洋行であった。<sup>19)</sup>

#### 四、博物館学的課題—〈人間展示〉の流れ

巴里万国博覧会が開催されてから三年後、一九〇三年三月一日から七月三十一日まで第五回内国勸業博覧会が大阪で開催され、巴里万国博覧会と同様に〈世界一周館〉が設置されている。これは、石川県小松町の橋本佐平、京都市の河本喜之助の発意により、「先年巴里博覧会に大喝采を博したる、世界一周館に擬したるもの」とある。その内容は、博覧会協賛会報告によれば、

世界一週館ハ人類館ト相隣セル一種ノパノラマ館ナリ日本支那欧州北米等ニ於ケル名アル都市港湾古跡ノ中十三ヶ所ヲ擇ヒテ油絵遠景ヲ描キ前ニハ人物家屋樹木船舶等ノ実物

若クハ模造物ヲ配置シ人物其他を時々動かシテ観客ノ目ヲ悦ハシムルニアリ<sup>2)</sup>

とある。巴里万国博覧会と同様に、船に乗り世界を巡るよう企画され、「まづ入口は神戸港の図にて海岸より海上を見渡したる處、次は台湾土人の風俗、第三の香港は船の乗客海上より港街を遠望する處、第四古倫母、第五蘇士の運河、第六巴里、第七瑞西、第八伊太利、孟買の埋没家屋発掘の處、第九伯林大、第十倫敦市街、第十一セント、ルイズ博覧会、第十二米國ナイヤガラの瀧、第十三布哇ホル、府の遠景」の十三景が設置されていた。ただ、根本的に異なっているのは、巴里万国博覧会で問題視された実物の〈人間展示〉を避け、「人物、樹木、家屋、船舶等を絵画様に配置し、人物、船、水流等を時々動かして、観覧者の眼を悦ばしむ仕掛なり」とあり、絵で描いたものであった。ちなみに、遠景画は小山正太郎が描いたものとい<sup>3)</sup>う。実物の〈人間展示〉を〈世界一周館〉で行わなかったのは、恐らく巴里万国博覧会での物議に配慮したものとされるが、それが取り止めになった訳ではなく、隣接した〈学術人類館〉で行われた。

〈学術人類館〉について、公式報告書によれば、「内地ニ近キ

諸島ノ人種ヲ集メ人類學上ノ研究ニ資セントノ目的ニテ設置セルモノニシテ坪井理學博士ノ贊助ヲ得テ設備頗ル整ヒタリ<sup>(2)</sup>と  
いう。具体的には、次のような様子であつた。

内地に近き異人種を聚め、其風俗、器具、生活の模様等を  
實地に示さんと趣向にて、北海道のアイヌ五名、台湾生  
蕃四名、琉球二名、朝鮮二名、支那三名、印度三名、同キ  
リン人種七名、瓜哇三名、バルガリー一名、土耳其一名、  
阿弗利加一名、都合三十二名の男女が、各其國の住所に模  
したる一定の区画内に団欒しつゝ、日常の起居動作を見す  
るにあり、又場内別に舞台の如きものを設け、其処にて替  
はるく、自國の歌舞音曲を演奏せしむ、絶だ奇觀なり、通  
券は普通十錢、特等三十錢にして、特等には土人等の写真  
及び別席にて薄茶を饗せり。人類館の設備は、坪井博士の  
贊助に由り、特に東京帝國大學人類學教室備附の物を貸与  
すること、なれり、(略)尚、博士は三月二十七日來阪、  
其節携帶せし世界人類地圖を展して、入館者の觀覽に供す  
ること、せり。右は大地圖の上に各國人種風俗を五十箇所  
より撰び、男女共百體の絵形を造りて、配列したるものと  
す。

この〈學術人類館〉は、日本の人類學者である坪井正五郎が、  
一八八九年の巴里万国博覽會で見た植民地部門での〈人間展示〉  
からの發案と言われている。一九〇〇年巴里万国博覽會におい  
ても、日本人たちの間では賛否があつたが、結局のところ芸妓  
たちの展示は大変な人気を博した。この内國勸業博覽會におい  
ても、その人氣にあやかり〈世界一周館〉が設置された。この  
〈世界一周館〉においては〈人間展示〉を行うことはなかつた  
が、別に〈人類館〉が設置された。しかも、このふたつの催し  
ものは隣接し、一体化したイメージを与えた。坪井は、この〈人  
類館〉の実施にあたり、あえて「學術」という名称を冠したと  
言う。その意図はあきらかではないが、一九〇〇年巴里万国博  
覽會の〈世界一周館〉で行われたような見世物的な展示から切  
り離し、人類学的な意図を明確にし、岡村が感じた「人類を動  
物と同視するものにして、頗る人道の主旨に反し」という非難  
を避けようとしたのかもしれない。

〔註〕

(1) 『千九百年巴里万国博覽會臨時博覽會事務局報告』農商務省、

- 一九〇二年。五〇四頁
- (2) 大谷嘉兵衛『欧米漫遊日誌』私家本、一九〇〇年。二四四頁
- (3) 大橋乙羽『欧山水』博文館、一九〇〇年。二二六―二二七頁。大橋は、雑誌の太陽六一―四（臨時増刊世界一周、一九〇〇年十一月）に「欧米見聞録」を寄稿し、そのなかで〈世界一周館〉の案内書を訳したものを掲載している。これにより建物内の二つの催し物の内容を詳しく知ることができるとある。
- (4) 下田次郎（西欧視学旅行記）『西洋教育事情』金港堂、一九〇六年十二月。七一―七二頁
- (5) 正木照藏『漫遊雜録』私家本、一九〇一年。二二三―二四頁
- (6) 池辺義象『歐羅巴』金港堂、一九〇二年。二〇九頁
- (7) 『箕作元八 滯欧「船梅日記」』井手文字・柴田三千雄編、東京大学出版会、一九八四年。一九〇〇年九月五日の項
- (8) 岡村司『西遊日誌』その三 鈴木良・福井純子翻刻、立命館産業社会論集三一―二、一九九五年九月。明治三三年二月三日の項
- (9) 岡村司『西遊日誌』その四 鈴木良・福井純子翻刻、立命館産業社会論集三一―三、一九九五年十二月。一九〇〇（明治三三）年五月五日の項
- (10) 前註9。岡村司『西遊日誌』その四。一九〇〇（明治三三）年五月五日の項
- (11) 前註9。岡村司『西遊日誌』その四。一九〇〇（明治三三）年五月三〇日の項
- (12) 前註9。岡村司『西遊日誌』その四。一九〇〇（明治三三）年五月三十一日の項
- (13) 前註9。岡村司『西遊日誌』その四。一九〇〇（明治三三）年六月二十一日の項
- (14) 建部遯吾は、滯欧の回顧書として『西遊漫筆』哲学書院、一九〇三年
- (15) があるが、特に〈世界一周館〉について記したものは見当たらない（『日本的興行物ノ取締』『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告』農商務省、一九〇二年。九〇〇頁）
- (16) 前註15『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告』九〇二頁 鹿島淑男編『洋行みやげ』一二三館、一九〇三年に所収される「烏森芸妓洋行談（扇芳亭女将の話）」の（巴里の見聞。一―頁。この談話は、同書目次には、「西洋土産（烏森芸妓の談）」とあり、題名が異なっている。この談話によれば、洋行した芸妓は壽美屋若太郎二十五歳、すみ子十八歳、壽美龍十八歳、勝太十九歳、喜撰十七歳、たすけ二十七歳、蝶々十六歳、いと二十七歳の八名であったという。また、パノラマ会社から一八八二―一八九九年まで日本に滞在し、多くの風刺画を描いたジュールジュ・ビゴーが通訳として付けられている。そのビゴーについて、「烏森芸妓洋行談（扇芳亭女将の話）」では〈通弁〉という項目で「パノラマ会社から私達に付けられました通弁はビゴーといふ仏蘭西人で日本へ十七年も来て居つたものでその人の女房は日本人でしたが仔細あつて別れたそうでこの人も初めは親切に通弁してくれましたが地方の要求に対して会社から度々苦情をいはれたので終には向ふへ付き一々いふ事に向ふへ通してくれなくなりました」と記されている。
- (17) 前註17『洋行みやげ』（外客禁制、一――三頁。「烏森芸妓洋行談（扇芳亭女将の話）」は、のちに篠田敏治編『明治百話』四条書房、一九三二年（のち岩波文庫に収録）に酷似した内容で掲載されている。
- (18) 前註17『洋行みやげ』、前註18『明治百話』をもとに、宮岡謙二『異国遍路 死面列伝・旅芸人始末書』私家本、一九五四年に物語風に記述されている。
- (19) 『第五回内国勸業博覧会案内記』井上熊次郎編、考文社、一九〇三年二月。六四頁

(21) 〈学術人類館ト世界一週館〉『第五回内国勸業博覧会協賛会報告書』第

五回内国勸業博覧会協賛会、一九〇三年。一九八—一九九頁

(22) 〈世界一週館〉『風俗画報』二六九(第五回内国勸業博覧会図絵 上)

東陽堂、一九〇三年六月。三七頁

(23) 前註20。『第五回内国勸業博覧会案内記』。六五頁

(24) 前註21。『学術人類館ト世界一週館』『第五回内国勸業博覧会協賛会報

告書』。一九八頁

(25) 〈学術人類館〉前註22の「風俗画報」二六九(第五回内国勸業博覧会

図絵 上)。三七頁

〔追記〕

1 本稿で紹介した下田次郎は、一九〇〇(明治三三)年八月十一日から

三十一日までパリに滞在した。その間、建部遜吾、岡村司が寄宿して

いたサンクルーの家に滞在している。下田が〈世界一周館〉を見学し

たのは八月二十一日であるが、その前の八月十三日には岡村と一緒に

博覧会を見学し、〈世界一周館〉附近を回り、「見世物がある。科学的

のもの、人種のもの、各国の踊り、世界一週、古生物館等様々である。

此日は会場を一週して見当を付け夕帰る」(前註4)とあるので、〈世

界一周館〉の内容や、それについての岡村の考えを聞いていたと思わ

れる。しかし下田は、催しの内容を紹介し、全体について「ドコ迄も

亡国的なり」と記しているだけで、具体的な感想はない。女子教育の

学者として、〈人間展示〉をどのように捉えたのか、非常に興味ある課

題である。

2 「烏森芸妓洋行談(扇芳亭女将の話)」(前註17)には、ドイツで訪れた

動物園の話がある。一九〇一(明治三四)年当時の動物園について、

一般の見学者の視点で語られたものとして博物館学的に興味深いもの

である。

3 文献により世界「一周館」あるいは「一週館」の二種の表記が認めら

れるが、本稿では本文においては〈世界一周館〉で統一し、引用文献

については原文のまま記載した。

4 本稿における文献などの掲載あるいは文章の執筆にあたり、現在の社

会規程では不適切な記述もあるが、歴史資料の引用ならびに歴史的

事項として掲載、記述した。

5 本稿は、二〇一六年十月二十九日開催の国史学会十月例会での國學院

大學大学院博物館コース二年(当時)下田夏鈴さんの(明治期におけ

る坪井正五郎の人類学展示)と題した発表に触発されたものである。

特に〈人間展示〉(下田さんは、「人種の展示」と称している)につい

ては示唆されることが多くあった。末筆ながらお礼申し上げます。なお、

この発表内容は、本稿執筆中に「明治期末期における坪井正五郎の人

類学展示と博物館構想」(「國學院雜誌」一一八一—二〇一七年二月)

として論文発表されている。